コメント

2017/02/24

岡本孝司

日本原子力学会がボランティアで本ロードマップの改定作業を進められたことに敬意を表します。

1. 体制の整備

ボランティアベースでは、ローリングの充実は大変に困難である。

例えば、JST には、CRDS(研究開発戦略センター)や LCS(低炭素社会戦略センター)が、国の予算で運営されており、必要な研究開発やそのための戦略を報告書の形でホームページに公開している。また、NEDO では、水素エネルギー白書、再生エネルギー技術白書を、同様にホームページに公開している。このように、必要な技術開発戦略は、中立的な機関において、国の援助を受けながら継続的に検討が進められてきている。これらの戦略検討は、決してボランティアでやられているのではない。

次年度以降のローリングについて、より充実をはかるために、予算的措置を含め検討をお願いしたい。

2. 重要度分類

最終的なゴール、重要度分類の判断基準については、広くステークホルダーや国民に分かりやすく説明されるべきである。現状のゴールや２つのベクトルは、まだわかりにくい。もっとシンプルなベクトルでの評価を進めることが国民の理解も得やすいのではないか。今後の改善が期待される。

また、１２名の評価委員による判断だけでは、「俯瞰性が不十分ではないか」という指摘に対して、説明性が困難である。パブコメなどを含めた、より幅広いステークホルダーからの意見を集約することも必要と考える。この場合、よりわかりやすいゴールと判断基準が必須となる。

3. トップダウンによる研究推進

現在進行中のプロジェクトが、技術マップ上のどこにアサインされるかの説明がなされているが、それは、ボトムアップ型のリンクである。このような説明では、どのようなプロジェクトでも、リンクを張ることができるので、マップの利用方法としては望ましくない。この説明では、国民への説明責任を果たしていない。

本来、マップで重要な開発項目に対して、どのように研究開発を進めていくかの戦略が策定され、その戦略に従って、研究開発プロジェクトが推進されるべきである。いわゆるトップダウン型の研究推進である。将来的に、このような形で、必要な予算を、必

要なプロジェクトに投資することができるように、少しずつ改善を進めることが必要である。

4. 評価委員名簿の事後公表

重要度分類の評価については、今回までは匿名で実施してきている。一方、公募事業などでは、公募終了後に審査委員名簿を公開している事業も多い。また、学会標準などでは議論の過程を公開し、メンバーも公開されるとともに、その所属などについても規定がある。

説明性や透明性を確保するため、次年度以降のローリングにおいては、評価委員の事後公表を検討していただきたい。例えば１年後に公表という事でもよいと考える。

以上